

故・古橋廣之進先生の教え

安部 喜方



1953年東京都生まれ。立教大卒。日本水泳連盟・学生委員、理事、競技委員長、常務理事を経て、2015年から副会長。日本オリンピック委員会マーケティング委員、立教大水泳部総監督、立教大体育会OBORGクラブ副会長。株式会社花門フラワーゲート専務取締役。

立教中学・高校・大学と10年間水泳部に所属し、大学時代にはキャプテンを務めた。卒業時、恩師・平賀孟先生から「君は選手としては二流だが、社会人としては一流になりなさい」とアドバイスをもらい、卒業後、母校のコーチに就任した際の「君は裏方に回って総務的な事や競技会運営の手伝いをしなさい」との平賀先生のご助言が、競技会運営に関わるきっかけとなった。

1995年、学生委員会の学生委員として大会運営に携わった時、「フジヤマのトビウオ」と言われ、雲の上の存在である、当時の日本水泳連盟・会長、古橋廣之進先生に出会った。

「日本選手が世界で戦うためには、競技会運営をどうしたらいいだろう？」と模索している時、古橋先生から「競技会運営を新しくするには、まず学生の大会から変えてみない」とのご助言をいただき、「学生ファースト」、いわゆる「アスリートファースト」を心掛けた競技会運営を行った。この時代の学生スイマーは、大会がどれくらい選手優先であったかを感じてくれたはずだ。今では当たり前のような大会運営は当時、勇気ある改革であった。

2001年に、日本で初めてのFINA（国際水泳連盟）主催大会となる世界選手権を福岡で開催することになり、メディアの露出を前面に連日満員の大会運営を行い、FINA Aからも高い評価をもらい、われわれにとっても貴重なものとなった。

翌2002年に、横浜で行われたパンパシフィック大会では、イアン・ソープ選手の活躍により、世界選手権福岡大会後に、観客の水泳への熱狂が続いた。この年、FINAの競泳国際審判員の資格を取得し、競技役員として国際大会を経験する機会を与えてもらった。さらに、

2004年のアテネオリンピックには、競泳の国際審判員として参加。これを機にIOC主催大会、FINA主催大会の両方の運営を経験することができ、国内競技会へのフィードバックを常に考えるようになった。

古橋先生には、「世界の競技会運営を見なさい」と助言された。また、日本選手が世界で活躍するには、日本の競技会運営を世界のスタンダードにする必要があると思われるので、選手が結果をだせるための大会運営を心掛けるように指導してくださった。さらに、「他の競技がどのような競技会運営をしているのかも勉強しなさい」とのアドバイスもいただいた。そこで私は、バレーボール、サッカー、陸上競技、体操など数多くの国内・国際大会を視察し、水泳競技に取り入れられるものを取り入れ運営してきた。

2009年FINA世界選手権ローム大会には、競技役員としてFINAテクニカルコミッションのメンバーで、この大会の審判長を務めた緒方茂生氏、同じくスターターを務めた江口和美氏の3人で参加した。最終日の前日、古橋先生から「競技役員をやってくれた3人の労をねぎらいたい」とお声掛けいただいた。このお言葉が非常に嬉しく、同時にその日の会食が先生との最後の時間

になるとは思いもよらなかった。

古橋先生は、FINAの副会長として、日本の誇るべき国際人として世界の方々から親しまれ、人望が厚い方であった。今の私があるのも、古橋先生がFINAの方々を紹介してくれたお陰である。先生の教えを胸に現在、2020東京オリンピックを2021年に控え、水泳競技のスポーツマネージャーとして、責任を全うする覚悟で望んでいる。またさらに2022年にはFINA世界選手権福岡大会も控えている。

今も、空を見上げて古橋先生と話す時、「先生だったらなんとと言われるだろう？」と常に自問自答しながら進んでいる。先生から教えられた多くの知識を競技会運営に携わる若手に引継ぎ、「古橋イズム」を残していければ幸いである。



2009世界選手権時に開かれた会食で。前列中央が故・古橋廣之進会長、後列左端が筆者